

『配信開始を待っています……』

開始予定時刻まで 05:00』

どうせ誰がやっても同じような、と毒つきながら仕事を終えて帰った時間は日付が変わる四十分前の夜中のことだった。今日が何曜日かはよく分からないが明日も出社しなければならぬだろうと思つて、何もかも昨日も一昨日もそのまた前日もやったような作業——シャワーとか——を終えて、どうせ見答める恋人も家族もいないからとだらしない格好で長いソファに身を委ねた。

防音の為の加工が施された天井を眺めながら、私は今やただ寝る場所である以外に何か存在意義があるのか怪しいこの家でまた夜を明かすのだ、と思つていた。この防音加工の天井も壁も、家賃も家の大きさも、入社して数年の独身女性であるところの私にはあまりにも過ぎた代物だ。私はそうした代物たちのひとつである豪華なゲーミングチェアに天井から視線を移して、そのチェアのメッシュで半透明になつている背もたれの向こうに、これまたもはや不必要なことにデュアルモニタになつているデスクトップを認め、ようやく気付いた。

そうだ、明日は日曜日で珍しい休日なのだ。

そして、配信を見に行かなきゃいけない。

今私はとある配信者の配信開始を待っている。LED電球なんだから電気代なんか気にしてケチつたつて別に何かあるわけでもないのに部屋の電気は暗く、いっぽうでそれとは対照的に青白い光を放ち続けているモニターをじつと見ている。大きな大きなタワーが机の下を陣取るゲーミングPCの前で、多機能でこつこつマウスを動かしながら、タッチタイピングで配信待機のコメントを打

つ。配信者がもうすぐ配信を始めますなどと告知したらすぐに反応できるように、デュアルモニタの片方に配信者のSNSを用意する。一週間ぶり、あるいはもっと久しぶりのはずなのに、この動きもはや作業であつて、機械的である。会社から帰宅したときもそうだった。これは無意識にそうしているのだ、身体がそうしたがっているのだと言えるかもしれないし、自発的な意思などそこにはない亡霊のようであるとも言えるだろう。亡霊と言うよりも機械みたいと言った方が近いかもしれないと思つたが、すぐに比喩に何を使つたところでそんなこと極めてどうでもいいことだと思ひ直す。

配信者はバーチャル・ユーチューバー、つまりVチューバーのサーシャ・グレイトフルだ。自分のゲームプレイの様子であつたりとか、あるいは近況報告だとかを配信の電波に乗せる配信者も、アバターを使って特定のキャラクターを演じて活動するVチューバーも、おたく文化の一翼を形成するジャンルとして知名度を上げつつある。特にバーチャルじゃないユーチューバーなんかは、小学生のなりたいたい職業ファンキングに食い込んで久しい。

サーシャ・グレイトフルという配信者は、もう数十年前に発売された高難易度のゲームばかりするから、基本的にVチューバーの視聴者の年齢層は低いとされる中であつて、懐かしさを抱きつつ見守る大人の視聴者が多いらしい。私は懐かしいかどうかはゲーム画面の画質くらいからしか分からないので、ただ苦戦しながらもじわじわと攻略していくさまを眺めているだけだ。

バーチャルであろうとなかろうと、アイドルを推すというのは大変なことだと思ふ。追っかけとは時間を消費する。いつ炎上するかも分からない、いつ引退するかも

しれない存在のために大量のお金を投下する。そして、お金を投下したことで得られる利益はそこまで大きくはない。刹那的な行為に見える。だが、配信を今から始めるこの配信者には、たぐさんの追っかけがいないことになるのだ。アイドルとはすごい。

そう、すごいのはアイドルだ。

若者の貴重な時間を誰とも知れない誰かに見せ続ける。人生を切り売りしてお金を得ている。だけれども、切り売りしてなおその地位は安寧じゃない。飽きられないように、変わり続けなければならない。進み続けなければ、留まることはできないのだ。時代の流行りを冷静に見極めて、やりたいことやった方が良いことを天秤にはかり続ける。そして大抵選ばれるのは後者だ。だったら、それは本当に楽しいものなのか？ やりたいことが出来る夢のあることなのだろうか？ 好きな事で稼げるフロンティアなのだろうか？

私がVチューバーをやめたのは、だからだと思う。

今日の配信はゲーム実況ではなかった。チャンネル登録者数が30万人を超えた記念の雑談で、配信タイトルもそれっぽいものになっている。用意されたサムネイルはとても豪華で、30万人ありがとうと言う感謝の文字が躍っている。これは続けた者のみが作れるサムネイルだと思つて何だか後ろ暗くて、画面から目を逸らしてモニターの左下の枠の方へと目が行くと、付箋の糊のあとが四つ縦に並ぶように見えて取れた。肝心の付箋の方にも糊が力を無くしてしまって机に落ちてしまったのが三枚。もう一枚の付箋はどこかに行ってしまったのだろうか。付箋は、

『今度からはアクビもミュート!』

『ちゃんと配信切ったか確認』

『スパチャには即反応! 明るくハッキリ感謝を述べろ』

と書いてあった。

私が辞めた時まだ登録者数15万だった元同僚のサーシャは、仲の良かった相棒が引退してからより一層奮起して、遂にその数を倍にしおさせた。眩しい。私も続けていけば、あるいはこうなる未来もあったのだろうか、と思つて、すぐにやめる。そんな妄想は無駄だつて何度も、何度も何度も、何度も何度も思つては思い返してきた。

どうせ誰がやつても同じような、と毒づきながら仕事を終えて帰った。

だが、どうせ誰がやつても同じような仕事を選んだのは私じゃないか。その方が安心だから、と。わたしについていた数方のファンも、いつかは離れて消えていくのだから、と。

だから、後悔なんでも何の役にも立たない。自己否定だからだ。それをしてしまうと、本当にどうにかなつてしまふような気がして怖い。いや、どうせ私のことだから、正確には、自己否定がどのような結果を招くにしても、そんな繊細な決断は出来そうにない。

ふとスマホを見ると、沼田真純——サーシャの中の人——から連絡のメッセージが来ていた。確か何通も既読無視していて、それで今回30万の舞台に乗ったのを知つて、ただ一言『30万おめでとう』とだけ送つたのだつた。

『ありがとう! これからもサーシャは常に進歩し続けるよ。変わり続けるよ』

『あ、そういうえば最近どう? 何やってる?』

『また久しぶりに飲みに行こうよ』

『紅葉ちゃん元気してる? つてコメもまた最近見るようになったし』

『測理ちゃんも誘わない? あつちも大変だつたみたいだしさ』

紅葉ちゃん、紅葉ちゃんか、と、その言葉を頭の中で反芻していく。牛充紅葉。決して口には出さない。もう捨てた名前だ。

あの頃は紅葉ちゃん紅葉ちゃんと、ニセの名前で呼ばれていた。今はどうであろうか。篠沢、篠沢さんと、いいのだろうか?

どちらの選択が正しかったか、なんて判断は到底できない。それはもちろん判断がつかないのではない。つけたくないでもない。つけることができないのだ。つけようという決意が足りない。じゃあその決意が得られたら判断しようとするのかを自問しようとするこさへ、その勇気がない。振り払うようにまた部屋を見渡す。広い。大きい。そしてその広さのせいで空気はどんよりとして動かないから温度のない重苦しさを以って私を抱き

しめてくる。孤独が否応なく募っていった、この空気感に堪えられずに声帯が震えようとしてくる。突然の不随意行為は結果として様にならず、ただただ死を待つ怪我人のような情けない呻き声になるだけだった。そしてこの呻き声も、壁と天井を覆う防音加工が響くことを許してはくれなかった。それは結果として部屋が狭いと錯覚させてくれたがそれは一瞬で、すぐに大砂漠に水を一滴たらしめたかのように容赦なく吸い取られるこの声の有様に息苦しさを覚えて息が詰まる。呼吸が早く、浅くなる。はあはあと立つ呼吸音は獣のようで、その音も容赦なく吸われていくが、それとは別にどうしてか耳からはこびりついて離れない。

防音加工の天井も壁も、家賃も家の大きさも、入社して数年の独身女性であるところの私にはあまりにも過ぎた代物だ。つまるところ私はこの家に不相応なのだ。この家は紅葉ちゃんが成した紅葉ちゃんのものだ。彼女がどこかにいなくなつて、代わりに残された私が居抜きしているだけに過ぎない。だからこの家にいるのが何だか居たたまれなくて、逃げるように会社に行っている。この家はただの休憩地点に過ぎないようにしている。なつてしまっているだけかもしれない。そこに私の作為は果たしてあるのだろうか？

意味のない問いだ。視界の端に居座るもう何日も開いていない寒色のカーテンはこの部屋の重苦しさに貢献しているように感じる。もっとも、開けたところに入ってくるのは大部分は街灯か、あるいはどっかの家から漏れた光で、月がもたらす自然光はせいぜいいくばくか程度混じるだけの、文明らしい光である。私が家にいる時はいつ開けたってそうなのだ。

文明らしい光を浴びたところで、素晴らしい自然光を浴びたつて。それで決断力がうまれるわけではない。

V チューバーをやつて何が楽しかったか。

V チューバーをやつて何が辛かったか。

V チューバーをやめて何を失ったか。

それを考えて、一体何の得があるというの？

得が無いからつて、向き合えないことは許されるの？

昔の私は、何になりたかつたのだろうか？

子供の頃の夢を、私はもう覚えていない。ただ一つ間違いないのは、無知で純粹なかつての私は、こんな生活を夢見ていたはずもないということだけだ。だが、夢を叶えられない大人など珍しくもない。無知で尊大なガキんちよが見るのは狭い、それはそれは狭い箱庭世界の中で見る幼稚で壮大な見果てぬ夢に過ぎないからだ。しかし、子供の頃の自分を馬鹿にしたところで、今の自分は優秀だということになるだろうか？ 子供らしい可愛らしさを否定したら、そこを根っこにして育つた私には何が残るといふのだろうか？

そういう自己否定を否定し、それをさらに否定するとうような、いつまでも低徊しつづけるような終わりのない思考をしては、私はちゃんと考えているんだという枠にはめて自分をこまかし続けている。自分は立ち止まっているのではないという理由付けの為に、堂々巡りを繰り返している。私は必死に頑張つてる、だから私は悪くない。吐き気するほど明快な理屈だ。では誰が悪いのかというところの考察を放棄しているから。

誰かが常に私の事を嘲笑っている、そんな体験に出会つたことはない。その意味するところは、ひよつとしたら私には笑われる価値すらないのかもしれない、ということだ。いや、それは単純に精神が摩耗していない、健全な証拠だ。待て、ということは私が今病んでいるのは全て仮病のようなものであつて低徊する思考達もそのフリに過ぎないつてことになるじゃあないのか。他人に對して病んでいるアピールをしたいわけではない。そうではなくて自分は病んでいるということに自分をおきたいのではないかという話だ……

沈んでゆく。

心地よさを感じている。

それを邪悪と口では罵つているけれども。

その時だった。待機画面が切り替わつて、小気味よい音楽が流れ始めた。配信待機の時間が終わった。ようやく5分が経つたのだ。配信者のSNSを開いておいたデユアルモニタの片方に目を遣れば3秒前に、始まりましたと呟いているので即反応。配信の方には呟けて偉いと書いた。一挙手一投足が褒められている。私だけがする事ではない。私だけが逃げたことでもない。

配信が、始まる。

何を悩むことがあるう？

はてさて、何を悩むことがあるう？